

学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



「深い学習」をめざす

子ども教育学部 初等家庭科教育法等担当教員 富田道子

小学校教諭養成課程の専門基礎科目にある「初等家庭」。今年度前期の本授業と学生の姿を一部紹介したい。

1つは、次の自然災害に備えた「減災」の授業。学生は①将来、教員あるいは地域の担い手として被災者支援の側に立つこと、②小学校の体育館が近隣住民の避難所になる場合が多いことを念頭に、多様な人々のニーズに応えるための避難所を大学体育館に設計した。発表では様々な工夫・配慮点が共有でき、UD理解が深まりつつあることを実感した。

2つめは、住まいを人権の視点から考える授業。日本国憲法第25条「生存権」の意味をかみしめながら小学校家庭科における授業のあり方を思索していた時、一人の学生からホームレスについての発言があった。自分の居住地域で見かけるホームレス状態の人が頭をよぎったという。学生からの要望で次週の授業内容を急遽変更し、大阪のNPO法人「子どももの里」の子どもたちとホームレス当事者へのインタビュー等を取り上げたDVDを視聴することにした。その日の小レポートには「生活するとはどういうことか」といった本質に目を向ける記述がみられた。

3つめは、児童の主体的な学習をめざしたワークシート作りの授業。「家庭生活と地域のつながり」を題材にした学生は、その授業を3年生社会科「町探検」の発展的学習として位置づけた。住まいと大学の往復のなかで気になっていた、宇品ショッピングセンターの地域における役割を児童に考えてもらいたかったからだという。この学生は自主的にショッピングセンターまで足を運び、営業を続けている店舗と客層の特徴をリサーチしてからワークシートを作った。

Entwistle*によれば、浅いアプローチ（学習）は授業で求められることをこなすことであり、それによって、授業を互いに無関係な知識の断片としてとらえ、事実をひたすら暗記すること等をさしており、深いアプローチは概念を自分で理解することであり、それによって概念を既存の知識や経験に関連づけ、根底にある原理を探し、必要なら暗記学習を用いること等とされている。

1年次のさまざまな学修や体験活動により、学生は確実に成長している。これからも期待を込めて彼らと向きあっていきたい。

* Entwistle, N. (2009). Teaching for understanding at university: Deep approaches and distinctive ways of thinking. New York: Palgrave Macmillan. エントウイスル, N. (2010) 『学生の理解を重視する大学授業』（山口栄一訳）玉川大学出版部.